
殻を割り、夢を創れ

—クメールの微笑との出会いから拓いた私の進路

同志社大学文学部4年 大橋 佑

「鳥は卵の中から抜け出ようと戦う。卵は世界だ。生まれようと欲する者は、一つの世界を破壊しなければならない」（デミアン、ヘルマン・ヘッセ）

上記の名言は作家、ヘルマン・ヘッセにより著作『デミアン』の中で語られた言葉である。人も、国家も、多種多様な出会いと経験を通して己の殻を破り、成長を遂げようとする。他者を観察する行為を通して己の姿を顧み、新たな視座を獲得し未来につながる道程を追い求めてゆく。国際交流とは、こうした自己と国家の“成長”への願望を抱く人々による、飽くなき挑戦の一端である。本稿では、NGOによるスタディ・ツアーでのカンボジア訪問と現地の人々との交流の経験を通し、私自身が切り開いてきた国際交流の世界を振り返っていくものとする。

2011年8月。私は盛夏の日本を発ち、空路インドシナ半島へと飛んだ。目的はNGOによるスタディ・ツアーを利用してベトナム・カンボジア両国へ訪問し、成長著しい東南アジアの現状を多角的に把握することにあった。また、日本においては意識を向ける機会の少ない東南アジアを訪問し、私自身の見識を広げていくことも目的の一つであった。私の参加したツアーの主眼はカンボジア訪問に置かれていたため、ベトナムではベトナム戦争の傷跡が残された建築物を訪問したり、枯葉剤により被害を受けた児童が数多く入居する病院を訪問するにとどまった。ベトナム戦争の傷跡は今もなおベトナム各地で散見されたが、道路はきれいに舗装され、東南アジアの一大観光地としてベトナムは確かに発展の兆しを感じさせた。しかしベトナムを発ち、同国一の商業都市サイゴンから陸路カンボジアへ向かうと、そこでは見た事も想像した事もない世界が眼前に広がっていた。日本の政府開発援助によって整備された国道1号線を走る私の乗車した大型バス。そこから見える風景は、ヤシの木が美しいコントラストを醸し出し、赤土の上を牛追いの少年が駆けていくのどかな田園地帯。およそ摩天楼が立ち並び、完璧に整備された歩道を人々が闊歩しているような、経済発展を成し遂げた先進国の様子とは異なっていた。

カンボジアは第二次世界大戦後、旧宗主国であったフランスから独立し王政が復活、ベトナム戦争の火種が国内に流入するまでは平穏な空気に包まれていた。しかしベトナム戦争で厳しい戦局に追い込まれたアメリカが共産主義勢力の周辺地域への流出を懸念しカンボジアに介入するようになると、カンボジアは東西両陣営の圧力を受けるようになり、不安定な政情から国民生活は疲弊、国家内部で権力闘争が巻き起こる。1970年にはクーデターによって王政が打倒され親米政権が誕生するが、同政権も1975年にはカンボジアの共産勢力「クメール・ルージュ」によって倒され、以下カンボジアはクメール・ルージュによる厳しい統治政策と内紛によって国民の多くが自由をはく奪され生命の危機に瀕するという、過酷な環境下を進むことになる。1979年にベトナム軍がカンボジアに入りクメール・ルージュの勢力を首都から追放したのち、1980年代の社会主義政権期を経て1991年のパリ和平合意に至るまで、カンボジアでは数百万人ともいわれる人々が命を落とし、人々は地雷の恐怖に脅かされ、基礎インフラの破壊や伝統文化の喪失によってカンボジアは国家としての機能が危ぶまれるまでに疲弊していた。その後国連カンボジア暫定統治機構や国際社会の支援によってカンボジアは喪失していた都市機能や基本的なガバナンス能力・司法制度を再生し、農業や漁業といった産業を復活させ、近年では安価な労働力を利用し

た工業製品の生産で経済発展を遂げ始めるようになった。失われていたクメールの伝統文化も復興も進められてきた。

カンボジアとは、そのような状況下にある国である。長きに渡り続いた戦争の惨禍が今も色濃く残されており、ストリート・チルドレンの問題やごみ山の問題、医療環境・教育環境の未整備など多数の社会問題を抱えている。私はそのカンボジアにておよそ2週間滞在し、カンボジア各地の大学生や日本語を学ぶ学生の方々と交流を続けた。またごみ山を訪れ、そこで生計を立てる方々にインタビュー調査を行ったり、地雷の被害者の方々とともにインタビューを通して言葉を交わすことが出来た。これまで日本の平和な世界観の中で生きていた私にとって、自身が想像もできないような過酷な環境下を生き抜いてきた人々と話をすること、隣に座り同じ空間の中で共に過ごすということは、非常に勇気を必要とするものであった。しかしどれほど生活環境が異なろうと、異なる言語を使用していようと、互いに未知の文化圏で生きていようと、国家の経済力に差が生じていようと、人は皆同じ動物である。英語や日本語が理解できる方々とはその言語を使用し、両言語とも使用することが出来ない人々とは身振り手振りを通して互いの意思を伝達することは可能なのである。訪問者である私たちが笑顔を維持し続け、コミュニケーションを取ろうとする積極的で貪欲な姿勢を失いさえしなければ、やがて互いの意思は伝わるようになる。私は異なる文化圏に住まう者同士が交流を通じて互いを理解しようと試みる時、最も必要とされるのは相手への敬意であると考え。私のインタビュー先は上述の通り、過酷な戦争を生き抜いてこられた方々やその血縁者の方々が多かったため、相手の方々の住まわれている地域の歴史を事前に把握したり、関係者の方々にインタビュー先の方の事情を事前に説明してもらうようにしていた。また相手の方々が気を許し、私にそっと話しかけてくださるようになるまで、いつまでも隣で待ち続けるようにしていた。人は自身のライフヒストリーや経験してきた文化を他者に語ることで安心感を得ることが可能だろうと思われる。国際交流を望むものは、時としてじっと待ち、また時として積極的に話しかけていかなければならない。適切に状況を読み取りながら、いかにして相手から話を聞き出すか。いかにして文化交流を実現させていくか。いかにして実りある共同空間を互いに構築していくか。そのすべては関係するすべての人々の相互理解への貪欲性と他者への敬意の姿勢の深さにかかっているように思われる。

カンボジアでは戦争を経験していない世代の人々、すなわち私と同世代の大学生や大学院生といった若年層の人々とも交流することが出来た。彼らの多くはカンボジア内戦の和平前後、すなわち1990年代前後に誕生している。彼らは直接戦争の災禍を経験してはいないが、肉親を亡くしている人々も多々いる。彼らとの交流においても状況と事情に応じた対応、すなわち私が国際交流の重要な要素であると考え“他者への敬意”が必要になる。しかし戦争後社会の復興の渦中にある彼らの関心は、“いかにして自身のキャリアを築いていくか”というところにある。彼ら学生は過去の歴史を学ぶだけでなく、未来についても考えていく必要がある。私がカンボジアで出会った学生の方の多くはそのような意識の元、日本語や英語といった外国語運用能力を高め、国内外のビジネスの場で活躍し故郷を豊かにしようとする意識であふれていた。私が日本語を現地カンボジアの学生に教えている学校を訪問した際など、私の周囲の全方位から学生の方々の質問が飛んできたものである。日本語についての質問、日本の文化や社会生活についての質問など、心が震えるほど気持ちの良い大きな声で彼らは質問をしてきた。自身の将来を懸けた学習の場にいる彼ら学生の貪欲な姿勢と他者への敬意の姿勢に圧倒された思いであった。しかし先に述べたように、国際交流とは一方通行の想いによって成し遂げられるものではなく、双方向に両者の関心、強い好奇心が作用して初めて成し遂げられるものである。“他者への配慮の姿勢”という調理道具と、“異文化圏に属する両者の強い好奇心”、“未来を見つめる素直な心”が作用しあって、初めて“国際交流”という料理の形は出来上がるのである。

上述してきたカンボジアでの経験を通し、私は紛争後・体制移行期国家の市民生活の再生・再編に強

く関心を抱いた。国内各地に人々が点在していたカンボジアは、現在首都や地方中核都市に人々が集まり始めている。カンボジアの人々は今、外国人との交流だけでなく、国内においても地域の旧住民と新住民との間で新たな交流の累計が形作られようとしている。私は自身のカンボジアでの経験を生かし、紛争後社会の人的・物的交流の研究をすることで、21世紀の現在においても紛争によって国家が疲弊し脆弱な状態にある国々の復興を手助けできないかと考えた。私は帰国後ソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）を利用して日本に留学を希望するカンボジアやASEAN各国の学生の方々に最新の日本情勢をニュース形式で伝えていくシステムを作り、彼らの国外での就学の機会を作ることに協力してきた。そして同時に彼らから最新のカンボジア情勢を伝えてもらい、私自身の視野の拡張に励んだ。従来とは異なり、インターネットが発達した現代においては直接会うことが難しい距離でも連絡を取り合い、写真や絵を通して自国の文化を海外へと広めていくことが可能になった。国際交流には決まった形がない。上述したように国際交流は料理のような存在であり、作り次第でその味を変えていくことが出来る。常に視野を広げる努力を怠らないことで、場所を問わず国際交流ができるようになった。こうした努力の蓄積は、やがて当事者に新たな視座を与えるとともに、可能性を感じさせ、進路を形成していくことにつながる。私はカンボジアでの経験を通し研究者として紛争後社会の復興の様相を研究し、現在紛争の渦中にある国々の復興に協力していきたいとの志を抱いた。カンボジアでの経験が私自身の殻を破ることにつながり、私に新たな視座を与え、道を拓いていく契機を与えてくれた。今、私は大学院入試に合格し、来春の大学卒業後は大学院でカンボジア研究を行う予定である。そして大学院を修了した後は、国際機関で平和構築の現場を通して自身の経験を生かしていくつもりである。漠然と海外で働くことを夢見ていた私に、具体的な夢と志を抱かせてくれたのはカンボジアでの経験であった。国際交流は国家と国家をつなげるだけにとどまらず、人と人との関係を深化し、各人に新たな視座を与え殻を破る機会を与えてくれる。国家と人をより平和的な空間へと導く契機、それが国際交流の醍醐味であり、国際交流の持つ本質なのである。

カンボジアは戦争の渦中に入る以前は、東南アジアの宝として知られていた。美しいクメール朝の建造物の数々、首都プノンペンの華やかな、花のような美しさ。これらはこの一世紀の間に破壊の憂き目にあい、その存続さえ危ぶまれた。しかし、どれほど過酷な時を経ても、唯一生き残ったものがある。それは荒野に咲く一輪の花のように美しい、カンボジアの人々の笑顔「クメールの微笑」である。今日グローバル化が進み、世界の人々は政治的、経済的、文化的に深く結びついている。先進国と途上国それぞれが複雑な歴史的背景を抱えているが、それでも世界は存在し、人々は交流を、文化と笑顔の交換を必要としている。それは人々が国際交流によって得られるものの尊さを理解しているからに他ならない。誰一人として、どのような国家であれ、一人では、一国だけでは存続することが出来ない。地球という限られた空間の中で共存していくすべを探すことは、生物が誕生して以来の使命である。そしてその使命に人類の多くは平和的に取り組もうとしてきた。グローバル化の気運によって人類はかつてないほど深く結びつこうとしている。国際交流によって人も国家もその殻を破り、外に出ていく必要が生じている。私は日本の文化と歴史を理解し、責任を持ってその美しさを世界に広めていきたい。それが私自身の殻を破り、日本の殻を破ることにもつながると思う。一人一人がそれぞれの殻を破ったとき、さらに理解は深まり異文化間での人と物の移動が促進するであろう。その時こそ、人類は共存・共栄の第一歩を踏み出すことになる。殻を割り、夢を創る。国際交流は私に、一歩外へ踏み出していく勇気を与えてくれた。そしてその機会は今日いたるところに転がっている。その機会を生かし、自身の人生を豊かに生きていくべく、少しでも多くの人々が国際交流の機会に接することを望む。希望にあふれた平和な国際空間の創造に、私たち日本人も役割を与えられている。卵の殻を破り、新しい道の空間を旅する魅力をお届けできるよう、私は殻を破る機会をいただけた幸運な人間の一人として、感謝と敬意の気持ちと大学で授かった良心の教育を胸に、歩み続けていきたい。